

源氏物語千年紀に寄せて
紫式部の通った道(一)

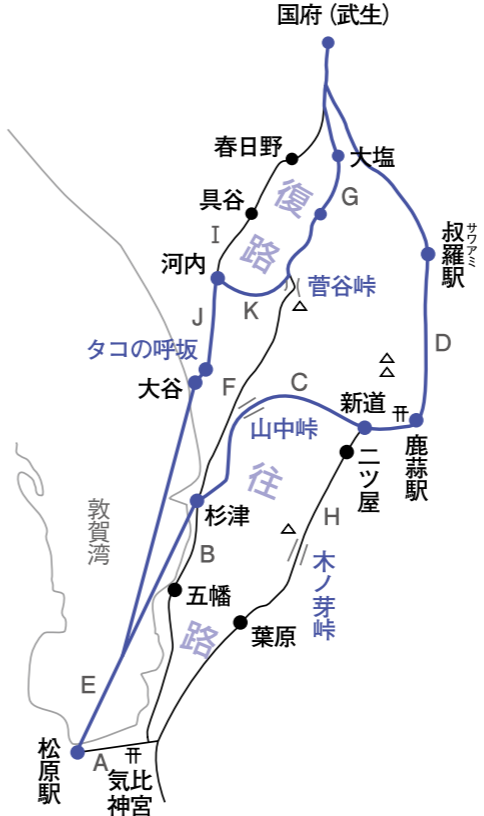
町内一円、桜の季節である。その花言葉は「優れた美人」。遠くから眺めて良し、近くで観て好し、杯に浮べて美しくだろう。桜の花見が日本人の間で定着したのは平安時代からだ。この時代の貴族社会における、人を愛することの喜びと哀しみ、人生の季節を感じる美しさとはかなさ、などを描いたのが紫式部の名作「源氏物語」であろう。その中の主人公光源氏が最も愛した紫の上の美しさについて「春の曙の、霞の間に見える桜のようだ」と作者は表現する。この物語が書かれてから、桜は年々歳々咲き続けて今年も千年目であるというが、その「千年目」とする根拠は何か。また、作者紫式部は娘時代に京の都から武生(国府)に来たが、その往路・復路は当町のどこを通ったのか、私なりに推理してみたい。

①「千年紀」ということの根拠について

先日、NHKの「その時歴史が動いた」の番組で、平安中期に藤原氏全盛時代を築いた藤原道長(以下道長)にスポットを当てていた。これによると、道長が一族の勢力争いに勝って左大臣(今の総理大臣)になったのは、九九六年(長徳二年・紫式部が武生に来た年)三十一歳の時であった。道長は長期安定政権を確立するため、長保元年(九九九年)、娘の彰子(十二歳)を二十歳の一条天皇に入内(結婚)させた(くしくも、この年二十七歳の紫式部も四十七歳の藤原宣孝と結婚している。二人とも第二夫人として)。しかし、五年経っても彰子に子供ができないことを心配した道長は、万葉集(和歌)や漢籍(白楽天の白氏文集など)に明るく、当時源氏物語の作者として宮中で評判となっていた紫式部を彰子のもとへ出仕させて、向学心の

高い一条天皇の興味を彰子の方に向けようとした。数年前に夫宣孝と死別し、幼な子を抱える三十三歳の紫式部ではあったが、再三道長に懇望された父の勧めもあって、寛弘二年(一〇〇五年)十二月に中宮彰子のもとに出仕することとなる。そして寛弘五年九月十一日、遂に彰子に敦成親王(後の後一条天皇)が誕生。その五十日の祝宴の様子が、紫式部日記(この年の七月から書き始める)にくわしく記されている。その中に『寛弘五年霜月ついたちの日。左衛門の督「あなかしこ、このわたりに、若紫やさぶろう」とうかがいたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむと聞きあたり』という一文がある。この日記文の前後には、親王誕生五十日の大祝宴とあって祝酒がふるまわれ、酔いにまかせて男達が大声でみだらな会話を交わす情景が記されている。こんな中

図(1) 行程推理図



で左衛門長官(当時の和歌の名人・藤原公任)が、からかい半分に先程の言葉が発したのだろう。これまでの彼女の本名は藤式部だったが、彰子のもとへ出仕して源氏物語の「若紫の巻」を書いたところ、それが宮中で大評判となり「むらさき物語」とか「紫のゆかり」とも呼んでいた。以後彼女を紫式部というあだ名(現代のペンネームか)で呼ぶようになった。これらの観点から先に記したこの日記文の一節を私なりに意識してみると『一〇〇八年十一月一日のこと。左衛門長官が私共の所に来て「失礼ながら、このあたりに若い紫さんはおら

れませんか」と聞く。光源氏にも似ていない者がなぜこんな風に聞くのだろう(不愉快だわ)ともなるか。いずれにしても若紫と源氏という言葉が、文献上初見されるのが、一〇〇八年に書かれたこの日記文であり、今年は一〇〇八年なので「千年紀」となるわけだ。しかし、先述のNHK番組でも、この三年前の一〇〇五年に「源氏物語の作者として有名な…」とあるので彰子のもとに出仕する前に、この物語は書かれていたことになる(少なくとも帚木・空蟬・夕顔の三巻は完成とみる)。とすれば、今年より三年前の平

成十七年が「千年紀」となる。

また、源氏物語五十四帖が全部完成したのは、この日記文の更に五年あとの長和二年(一〇一四年)、式部四十一歳の時なので、真の「千年紀」は平成二十三年にすべきではないか—とも考えられるのである。

②紫式部の通った道

長徳二年(九九六年)六月、紫式部(二十四歳)は越前国司(現在の知事)となった父藤原為時に付き添って、越前国府(武生)に。式部が八歳の時、父為時が娘の学問的才能に驚き「この娘が男であったら」と慨嘆した話は有名であるが、好奇心の強い式部は、

尊敬する師でもある父に付き添う、人生でたった一度の都離れの旅を選んだと思われる。式部が残した自作歌集「紫式部集」などから、その通ったと思われる道筋を推理してみた。

a. 往路

(京→武生) 京の都から陸路大津へ、ここから舟で三尾駅まで来て一泊。翌日、再び舟で新結駅(現在の塩津)で二泊目。次の日は陸路と

なり、父娘は輿、荷物は牛馬で疋田経由(七里半越え)で越前国に入り、敦賀の松原駅着で三泊(氣比神宮参拝や天候などでもう一泊も)と、ここまでのルート説には異論がない。問題は次の敦賀→武生のルートで、これには定説がない。そこで、通った可能性のある道を、三つの特別に考えてみることにした。

A・木ノ芽峠越(図1)AHD)

このルートは、式部父娘が旅した平安時代の北陸官道。越前国司としての赴任下向だから当然天下の官道を通ったはずとして、この説を取り上げる人が多い。距離は短いのだが、峠の高さが六二八メートルと一番高く疑問が残る。

I・山中峠越(図1)ABC D)

木ノ芽峠より古い奈良時代の北陸官道。長所は峠が三峠中最低の三九〇メートルだが、距離が木ノ芽峠より長いのと、Bの道はかなりアップダウンが続く難所なのが気になる(図2)峠道高低図参照)。しかし、A→B間の陸路のかわりに、Eの舟旅をすれば陸路が半分最短となる。また、式部父娘は輿に乗

り荷物も多く、舟にすれば従者の体力消耗が削減される(琵琶湖も舟で移動)。また「紫式部集」には次のような歌が出ている。

行めぐり 誰も都にかへる山
いつはたとときく 程のはるけさ

「かへる山」は今庄の鹿蒜(鹿)の山々、「いつはた」は五幡(地名)と何時かまたとの掛言葉。式部は万葉集に明るいので大伴家持の次の歌も知っていたはずである。

かへる身の 道いかむ日は
いつはたの 坂に袖振れ
我をし思はば

五幡村は歴史が古く天平二年(七四八年)敦賀湾に蒙古が来襲した時に、五本の幡が天から降り敵を敗走させたことから付けられた名だといふ。こんな歴史を持ち、万葉集などの歌枕として出る五幡を、式部はぜひ海から見たの

ではないだろうか。この日は鹿蒜駅で一泊し、余裕があれば鹿蒜神社に参拝しただろう。翌日、この時代は日野川が不安定だったため、今の今庄駅より西側、即ち藤倉山・鍋倉山の麓を通って湯尾峠に出て淑羅駅(現在の鯖波)で一泊。

式部父娘はこの行程で、京の都から武生まで、約五〜六泊の下向旅となったようだ。ウ・菅谷峠越(図1)ABFG) 杉津・比田までは山中峠越と同じルートだが、ここから更に北進し、菅谷峠(五七二メートル)瓜生野・大塩・国府(武生)最短距離を殆ど一直線に歩く道で、北陸古道。まほろしの北陸道などと呼ばれている。よほどの健脚者でない限り、敦賀から武生まで一日では歩けない。旅行者の道

というより、杉津や大谷など東浦一帯で生産された塩を、国府の大塩に運ぶために古代から使われた塩の道である。従って、この道を式部父娘が通ったとは考えられない。(以下次号へ)

図(2) 峠道高低図

